令和4年度 学校評価 自己評価書

あま市立七宝小学校

1 総括

(1) 教育目標 (学校経営案より)

「じょうぶで、なかよく、しんけんに」を校訓とし、知・徳・体の調和のとれた人間形成を目指すとともに、新しい時代に必要となる資質・能力の育成を図る。

(2) 本年度の重点努力目標

ア 「社会に開かれた教育課程」の実現

- ・ 3つの資質・能力「【学んだことを人生や社会に活かそうとする学びに向かう力・人間性】【生きて働く知識・技能】【未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力】」を育成するために、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める。

イ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

- ・ 「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」という視点を大切に、受け身型の授業ではなく、能動的に学び続けることができるよう、学びの過程を質的に高めていく授業を目指す。

ウ 「自己有用感」の育成

- ・ 学校・家庭・地域が連携・協働し、「つながる」学校づくりを推進することによって、地域の一員としての自覚や貢献する気持ちを育成したり、学級で役に立っている実感を味わわせたりする。

エ 多忙化解消に向けた取組

- ・ 積極的な年休の取得、定時退校日を設定し、長時間労働の見直しを図る。多忙化解消によって生まれる教員相互のコミュニケーションの時間や場を確保し、心身共に健康を維持できる職場づくりに努める。また、校務支援システムを有効に活用することで、成績処理・文書作成の業務の負担軽減を推進する。

2 自己評価の実施体制

(1) 調査時期 令和4年12月13日～令和5年1月10日

(2) 調査項目 別紙参照

(3) 調査対象 有効回答者数/対象者数

昨年度より、グーグルフォームを用いたタブレット、スマートフォン等で行うアンケートを実施

・児童 368名 / 389名 ・保護者 293名 / 306名 ・教職員 26名/全26名

3 調査結果【資料として添付】別紙アンケート結果参照

4 考察【児童・生徒、保護者、教職員、地域等の総括的考察 昨年度との比較】

(1) 児童の評価

- ・ 昨年度同様、全体的には肯定的な意見が多く、学校生活において満足と感じている児童が多い。
- ・ 「学校へ来るのは楽しいですか」「仲よく生活していますか」に対しては、昨年度と比べて肯定的な意見が多くなったことから、学校生活を楽しく過ごす児童が増えてきていると考えられる。
- ・ 「授業中、できるだけ進んで自分の考えや答えを発表していますか」に対しては、昨年度と比較して高学年の評価が低い傾向にあることから、学年が上がるにつれ、自分の意見を発信しようとする力が不足してきていると考えられる。
- ・ 「ありがとうと感謝の気持ちを伝えてありますか」に対しては、昨年よりも肯定的な意見が増えてきていることから、本校の取組である「ありがとうの実」の成果が表れてきていると考えられる。
- ・ 「地域の方に進んであいさつができていますか」に対しては、昨年度同様、評価の低い児童が多い。

(2) 教職員の評価

- ・ 昨年度同様、半数以上が質問に対し肯定的な意見を持ち、達成感を感じている職員が多く見られる。
- ・ 「子どもたち一人一人に居場所をつくることができたか」「一人一人を大切にしたい指導を行うことが

できたか」に対しては、昨年度より肯定的な意見が増え、子ども同士の関係強化への取組が実を結んでいると考えられる。

- ・ 「退校時間を意識して、業務をすることができたか」に対しては、昨年度より低い評価になっている。

(3) 保護者の評価

- ・ 昨年度同様、全体的に肯定的な意見が多く、子どもが学校生活に満足していると感じている保護者が多いことが伺える。
- ・ 「おさんは、あいさつをよくする方だと思いますか」に対しては、昨年度同様、全項目中で達成状況が一番低く、コロナ禍での影響が考えられる。
- ・ 「学校はいじめ防止や発見に努めていると思いますか」に対しては、昨年度と評価が変わらないことから、保護者は、学校での子どもたちの様子に不安を感じていることが伺える。

5 成果と課題

《成果》

- (1) アンケートの結果から、子どもたちは学校や学級での生活に全体的に満足していると感じ、保護者は安心して通学させている意識が伺え、教職員は一人一人を大切にされた指導を心がけていることによって、学校は教育活動においてよい環境を整えていることができています。今後もさらに学校・家庭・地域が一体となって、新しい時代に必要となる資質・能力を育成していく環境を整え、さらに社会に開かれた教育課程の実現に向けて、邁進していく必要があると考える。
- (2) 昨年と比べて今年度はさらに、児童は「『ありがとう』と感謝の気持ちを伝えている」教職員は「感謝の気持ち等豊かな心を育てることができた」保護者は「感謝の気持ち等、豊かな心づくりに学校は努めている」という意識が重なり、子どもたちの「自己有用感」の育成につながった。学校での取組の一つとして、児童・保護者・教職員が感謝の気持ちを伝える「ありがとうの実」の実践が成果として表れたと考えられる。

《課題》

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めていく上で、タブレットの活用が活発になっている一方、授業において聞く力が育ちつつあるものの、児童も教職員も共に学びを伝え合い、考えを深めることが不足していると感じている。保護者も子どもたちの学習について、内容をよく理解しているかどうか、不安に感じている割合が増えているため、授業の進め方を改善していく必要がある。
- (2) 児童・教職員・保護者共に、学校が楽しい、または楽しい学校になるよう努力しているが、その反面、児童はいじめではないかと思ったことがあると言う意見をもっているにもかかわらず、教職員はいじめ防止や早期発見・早期対応に努めることができていく割合が多い。いじめに関し、現状認識にずれが生じていることを重く受けとめていく必要がある。
- (3) 教職員アンケートで「退校時間を意識して業務をすることができたか」に対し、昨年度より評価が低くなっている。校務支援やタブレットの有効活用だけでは業務改善につながっていないと考えられる。

6 改善策

- (1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、授業研究をしていくことが必要である。子どもたちは、タブレットの活用により、自分の考えや気持ちを表現することができてきた。今後は、子どもたちが、自分の考えや気持ちを互いに伝え合い、より深く学び合う授業を進めるための研究を行っていききたい。
- (2) 日々の生活の中で、児童の様子をつかみ、児童の気持ちに寄り添う指導をより一層行うことが必要である。児童の気持ちの変化に気づくことができる教師集団になるとともに、学校から情報発信を積極的に行い、地域や保護者が支援しやすい環境・体制を整えていきたい。
- (3) 今年度も昨年度に引き続き、多忙化解消に向け、行事や会議の精選、校務支援やタブレットの有効活用、学年や校務分掌における組織としての役割分担など、具体的な業務改善を行うことが急務である。